

-大学院歯学独立研究科-

第 144 回 中間発表会 プログラム  
第 51 回 テーマ発表会 プログラム

大学院学生等が、これまでの研究成果を発表します。  
どなたでも聴講できますので、多数の参加をお待ちしております (聴講申込不要)

場 所：実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナー室

日 時：2026 年 2 月 25 日 (水) 17 時 25 分 開会

-2026 年 2 月 25 日 (水) -

No.	発表区分・予定時間	演題名・発表者	審査委員
	17:25	開会挨拶	-
1	[中間] 17:30~18:00 司会:岡藤教授	「機能的マウスピース型装置による小児の口腔機能変化と装着時間の関係」 大滝 素世 硬組織疾患制御再建学 臨床病態評価学	主査:正村准教授 副査:大須賀教授 :川原良美 教授
2	[テーマ] 18:00~18:10 司会:川原良美教授	「歯列矯正の後戻り原因の基礎研究 -後戻りメカニズムに対する「新しい仮説」の検証-」 廣 理芽 健康増進口腔科学講座 口腔健康分析学	-

## 発表内容の要旨(課程博士)

### Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No.	ID#G 2303	入学年 Entrance Year	2023	年 Year
(ふりがな)	おおたき そよ			
氏名 Name in Full	大滝 素世			
専攻分野 Major Field	臨床病態評価学			
主指導教員 Chief Academic Advisor	岡藤 範正			
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 <small>Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation / The Matsumoto Dental University Society</small>			
演題名 / Title of Presentation				
機能的マウスピース型装置による小児の口腔機能変化と装着時間の関係				
発表要旨 / Abstract				
<p>【目的】小児期は口腔機能の獲得が重要であるが、その発達が遅れ口腔機能発達不全症と評価される例が増えている。機能的マウスピース型装置は10時間以上の装着が推奨される一方、短時間装着を口腔筋機能療法のために用いた報告は乏しい。本研究では、同装置を1日約30分装着した場合の口腔機能および歯列形態への影響を検討した。</p> <p>【対象者と方法】本研究は、2024年4月から2025年5月に大滝歯科医院を初診した小児のうち、口腔機能発達不全症と診断され、保護者より文書同意が得られた混合歯列期患者を対象とした。対象児は初診時年齢5～11歳で、機能的マウスピース型装置を1日約30分間、保護者の管理下で1年間継続使用できた8名とした。歯列弓幅径の基準として、辻野・町田による正常咬合児を対象とした累年のデータを参照した。すべての被検者に対し、初診時と装置装着1年後の2時点で、舌圧・口唇閉鎖力測定、嚥下機能評価、歯列弓幅径の測定をした。</p> <p>【結果】1. 舌圧は短時間装着群の全例で増加し、口唇閉鎖力も多くの症例で上昇を示した。2. 乳児型嚥下の残存が認められていた6症例では、舌の介在や側方突出などの所見が減少し、嚥下様式の改善が認められた。3. 歯列弓幅径の変化では、多くの歯種で基準値(辻野・町田)を上回る拡大量が認められた。</p> <p>【結論】本研究により、機能的マウスピース型装置を1日約30分装着する短時間の使用であっても、舌圧・口唇閉鎖力の向上や嚥下機能の改善が認められ、歯列弓幅径にも増大傾向がみられた。これらの結果は、短時間装着が口腔機能発達不全症に対する介入として一定の効果を有する可能性を示唆するものである。今後は、本来の推奨装着時間で経過を追った症例を対照群として追加し、比較して統計を用いて分析・検証していく。</p>				